

Title	カーレン・ブリクセン-人とその作品-についての小論
Author(s)	岡田, 令子
Citation	大阪外国語大学学報. 29 p.221-p.230
Issue Date	1973-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80473
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

カーレン・ブリクセン

—人とその作品—

についての小論

岡 田 令 子

Karen Blixen-Isak Dinesen

A Report on

Herself and Her Works

I

“Hvor gaadefuldt og svært det er at leve,” tænkte han,⁽¹⁾ “og hvad betyder det altsammen?—Hvor kan det være, at mit eget Liv forekommer mig af saa uendelig stor Betydning, mere betydningsfuldt end noget andet, som er hændt i Verden?—Om hundrede Aar vil der maaske være Folk, som læser om mig og mit Mismod i Aften, for at underholde sig,—og maaske finder de det da slet ikke underholdende.”

(Syv fantastiske Fortællinger, Vejene omkring Pisa I s. 12)

「生きるということは、何と謎めいていて困難なことなのだろう。」と⁽¹⁾彼は考えた。「そして、一体それが何を意味するのだろうか。私にとって、私の人生が今迄に起った何ごとにもましてはてしなく重要に思われるのは、何故なのだろう。百年もすれば、人びとは、私のことや、私の今夜の悲しみについて、自分が楽しむために読むだけだろうが、はたして、それさえどんなものなのだろうか。」

年経たぶなの木の下で、だまりつづけるKaren Blixen の墓石の前で、ふと彼女の作品の、こんな一節が思い出された。⁽²⁾

Karen Blixen (1885—1962) の作品に、筆者がふれたのは、ごく最近のことであるが、外大50周年記念にあたって、彼女の作品の一端についてのべる機会を得たことは、大きなよろこびである。

Karen Blixen が『魔女』⁽⁵⁾のように、その素姓も明らかにされないまま、米国文壇に現れ、⁽⁴⁾ センセーションを巻き起したのは、1934年であり、翌35年、祖国デンマークに於ても、ユニークな作家として知られるようになってから、まだ40年も経ってはいない。

彼女も若い頃、自分の人生の後の三分の一近くが、短編作家として世に迎えられようとは夢にも思わなかった。⁽⁶⁾ Isak Dinesen というペンネームで、英米文壇にデビューした作品 *Seven Gothic Tales* は、はじめ英語で書かれ、その後、彼女自身の手によって、デンマーク語に書き改められて、*Syv fantastiske Fortællinger* として、祖国の読者にも知られるようになった。

17年間、英領ケニアで農園を営んだが、この仕事は失敗に終わり、すっかり破産して、帰国しなければならなくなり、今度は生活のため⁽⁷⁾ 夢中になって書きだしたが、ケニア滞在時代からすでに、自分の農園で働いていた土着の住民を相手に、物語をつくってはそれを彼らに聞かせていたという。⁽⁷⁾ 『昔、昔二つ頭の象を持った男がいて……………』⁽⁸⁾ と言った具合に、とてつもない『ナンセンス』をつくり、⁽⁹⁾ ソマリやマサイ族の男女に語り聞かせることに興味をおぼえ、雨季になると、時間つぶしに、物語を書いたりもしていた。そのためか、Karen Blixen の短編は、あたかも目の前の聴衆に話しかけるように、生き生きと書かれている。

主として、19世紀前半を生きた人物を登場させながら、不思議で、神秘的な、又超自然とも言える世界をつくり、そこで彼女の人生観、宇宙観ともいうべきものを、読者の前にくり広げてみせた。

1954年、Ernest Hemingway は、⁽¹⁰⁾ ノーベル賞を受けることになったが、それを知った時、この賞は自分よりむしろ Isak Dinesen が受けるべきである、といったといわれる。彼女はそれ以来、ノーベル賞の候補にあがったが、受賞の栄をみないうちに1962年9月7日に他界した。

この小論では、Karen Blixen-Isak Dinesen の作品を理解するに必要なと思われる、彼女の略歴をまづ紹介し、デビュー作の短編の一つ、*Vejene omkring Pisa-The Roads round Pisa* を例にとって、作品内容の一端をさぐってみることにとどまるが、その他の作品についても、他の機会にのべてみたいと希望している。

II

Karen Blixen の生れた Rungsted の町は、コペンハーゲンから北へ25 km の海岸沿にあり、彼女の生家は 'Rungstedlund'⁽¹¹⁾ と呼ばれる白壁の美しい建物で、後に広い林をひかえ、前には小さな漁港があり、対岸には Øresund 海峡をへだてて、スウェーデンがみえる。彼女の生れた年は1885年であるから、これは詩人 H. C. Andersen⁽¹²⁾ が死んでから、10年目にあたる。父の代からここに移り住んだが、父の家は代々 Djursland⁽¹³⁾ の名門で、姓は Dinesen といった。家族の中には王室に仕えたり、貴族と縁組をしたり、軍人になるものが多かった。⁽¹⁴⁾ 彼女の父 Wilhelm Dinesen (1845—1895) も次男であったためか軍人となり、祖国とドイツの戦いに参加し (1864)⁽¹⁵⁾ 仏独戦争 (1870—1871) にも敗戦側についていた。彼は参戦の経験を本にしたが、特にパリ・コ

ミューンについては、⁽⁶⁾*Paris under Commune*（コミューン下のパリ）という一冊にまとめた。そこで彼は、フランス人同志が流血の闘争の中にあるのを見て、自分の仏軍への参加の意義を考えさせられた。丁度その時パリに届いた報せで、自分の愛していた従妹の Agnes Frijs が、20才の誕生日を前に、イタリー旅行中に病死したことを知り、大きな打撃を受けた。これが原因で、アメリカのウエスコンシンに渡り、森の中で狩をしながら隠者に近い生活を送ったが、時どき交渉のあった、インディアンなどの生活を *Jagtbreve*⁽⁷⁾（狩の手紙）として世に出し、作家としても知られていた。Karen Blixen は女三人、男二人姉弟の中で、上から二番目に生れ、父が特に彼女を可愛がり、よく散歩に連れ歩いては、自分の両親や、その家族の話をしたり、道に生えている草木について語った。だが、彼女が10才の時、当時 Grenå 地区⁽⁸⁾出身の貴族院議員であったこの父は、種々の問題になやまされた結果、⁽⁹⁾ コペンのペンションの一室で自殺をとげ、これが、何時までも彼女の内面に深い影響を与えることになった。

母は豪商の出で、Ingeborg⁽¹⁰⁾といい、父の目にはあまり美しくない婦人であったが、若い頃には政治にも興味を持つインテリ女性であった。しかし、夫の死後はずっと黒い服をつけて、子供の養育に専心した。

近くの学校まで、25 km もあったので、子供達は母と、未婚の Bess と呼ばれる叔母と、祖母の三人の女性から教育を受けたが、彼女は幼い時から母国の文学はもとより、英仏文学をはじめ、世界の古典に親しみ、特にシェークスピアについては深い知識を持つようになった。子供の時から詩や劇などを書き、家族で上演することもあった。又、英国などで、大学の教授の家庭で夏休みを過ごすなどして、もともと得意であった語学に磨きをかけたりもしたが、書くという秀でた才能をのばそうとはせず、絵の方に進むべく専門教育を受けることになったのは、ただ彼女を取りまいていた三人の女に反抗を示すためであった。1903年から1906年までコペンハーゲンの美術学校で修業をし、さらに、絵の勉強という名目で、パリやローマに遊学したが、これらの大都市は、彼女に強い刺戟を与えた。立派な画家にはなれそうもないことに気がついていた彼女は、20才を過ぎた頃には、小品を文学レビュー⁽¹¹⁾に発表したりしていた。

その頃から、スウェーデンの男爵であった従弟の Bror von Blixen-Finecke (1886—1946) から何度も結婚を申し込まれていた。しかし、何の運命のいたづらか、Bror には双児の兄弟があり、彼女はもう一方の Hans の方に思いを寄せていたが、彼はそれには答えなかったのであった。愛がないと言うことよりも、彼の父の手伝いをするだけで、独立した生活を送っていなかった Bror と南スウェーデンの田舎で送る生活を考えると、気がすまず、申し込みをしりぞけていた。しかし、ちょうどその頃、親類にアフリカへ行った者がおり、その話に Bror も Karen も刺戟され、当時旧家の圧迫からのがれたいと望んでいた二人であったので、ローマから帰ってから Karen は Bror と婚約し、親戚の出資で二人はアフリカで将来を切り開くことになった。先づ Bror がケニアに渡り、6000 エーカーの土地を、高さ 2000 m の Ngong 高地に買って、コーヒー園の準備をし、翌年 (1914) 1 月 Karen の上陸した Mombasa で結婚式を挙げたのは、彼女が 28才の時であった。

男爵の称号は Bror との結婚によるものである。一年後には、この結婚の由に、彼女は不治の

病にかかり、その上、夫には恋愛沙汰が多く、一人で農園にいることが多かった。時としては、狩をすることを夫から習ったり、第一次大戦中は二人で英国側について活躍したが、その後1922年正式に離婚した。

しかし、1919年にはすでに Oxford 出身の Denys Finch-Hatton (1887—1931) に出会い、彼女の生活はより満たされたものになっていた。Denys はアフリカ探検家として、指導的な位置を占めていたが、同時に高い文学的教養を身につけており、行動と思考の両者をそなえ、音楽に対しても、鋭い感性と才能を示し、彼との出会いが、Karen Blixen の精神的糧となり、その作家生活に大きい影響を及ぼした。アフリカ滞在中の回想録⁽¹²⁾にも Denys のことについて多くが語られている。

彼女は土地の人びとに愛され、彼らの友人とも、医師とも、教育者ともなりながら、農園をほとんど一人で経営した。その間、母や弟 Thomas Dinesen⁽¹³⁾が数回に渡ってアフリカを訪問し、彼女を助けてはいたが、それまで赤字つづきであった農園が1931年遂に破産し、それを売り払い、その後始末に奔走していた時、運悪くも Denys は自ら操縦する飛行機が落ちて死亡した。

同年、Karen は、17年前自分がアフリカに渡った時、アデンへ迎えに来てくれて以来の無二の親友であり、忠実な召使いであった Farah⁽¹⁴⁾ にモンバッサー返つきそわれて、ただ一人アフリカをあとにした。

彼女がアフリカを去る迄を、その活動の前半とすれば、後半は故郷の Rungsted へ帰り、弟 Thomas が経済的援助を二年間与えるという約束で作家生活に入り、1934年前述のデビュー作が生れたのである。

世に認められはじめたのを幸いに、その才能を生かして、ジャーナリストとして、もう一度アフリカへ行ってみたいと思った Karen Blixen は、英国政府と交渉するが、聞き入れられず、ジュネーヴの国際連盟本部で働いたりしながら、⁽¹⁵⁾ 第二の傑作 *Out of Africa* を1937年、英語とデンマーク語で発表し、その後、デンマークの新聞、“Politiken” の記者としてベルリンに派遣されたりもした。

1941年には、*Seven Gothic Tales*, *Out Of Africa* に続いて、第三の傑作、*Winter's Tales* が英語で発表されるが、原稿は、ドイツ軍占領下にあった祖国から、中立国スエーデンのストックホルムへ送られ、さらにロンドンへそれからアメリカへ渡ったのであった。

若い頃の Karen Blixen があこがれ、彼の入院中には花束を送った、ヨーロッパの大批評家 Georg Brandes (1842—1927) は、彼女の帰国後の成功を見ずして世を去っていたが、自国のノーベル賞受賞者として知られている Johannes V. Jensen⁽¹⁶⁾ など文学者たちとも行ききがあり、若い作家の中には、彼女を慕って、Rungstedlund に集まって来るものもあった。

当時のデンマーク文学界は、リアリズムがその主潮であった頃で、Karen Blixen は生活環境からして、デンマークに、死にたえようとして、いまだ残っていた一部の貴族や、上流社会にしか接することがなかったから、そういった社会にのみ題材を求めた彼女の作品も、全く文学界を驚かすものであり、どのように彼女を位置づけてよいか、わからなかった。⁽¹⁷⁾

ドイツ占領下にあっても、新しい Pierre Andrézel という新しいペンネームで、作家活動を

つづけ、読者は次第にふえていった。戦後1952年には、*Babettes Gæstbud* (バベットの宴) や *Kardinalens Tredie Historie* (枢機卿の第三の物語) など母国語でかきつづけ、前者は当時の名優、Bodil Ibsen (1889—1964) の朗読によって、ラジオを通じ広く人びとに知らされるようになった。彼女が自分の最後の作品になると思った *Sidste Fortællinger* (最後の物語) は1957年に発表されたが、すでに、それ迄には1955年に H. C. Andersen 賞を受けており、さらに Henri Nathansen の記念賞、Henrik Pontoppidan 賞などを国内で受け、⁽³⁸⁾ 1957年にはアメリカン・アカデミーの名誉会員として迎えられ、さらに、1960年に母国デンマーク・アカデミーの会員となった。⁽³⁹⁾ この年には *Sandhedens Hævn*⁽⁴⁰⁾ (真実の報復) が T. V. 劇場のプログラムにのせられた。アフリカの回想録に属するものには、前述の *Out of Africa-Den afrikanske Farm* の他に、1960年発表の *Skyggen på Græsset* (草原の上の影) がある。

随筆としては、その人生観をのべた、*On Mottoes of My Life* (1962) があり、前述の作品とは、異ったジャンルのものである。若い頃に使ったペンネーム Osceola⁽⁴¹⁾ は、作品題名 *Osceola* となって、これも1962年に世に出た。すなわち、彼女の他界した年であった。その翌年には *Fra det gamle Danmark* (昔のデンマークより) と Ehrengard (エーレンガード) の短編集が、1963年には記念全集7巻と、抜萃集 *Karen Blixen et udvalg*⁽⁴²⁾ が出版された。この抜萃集にある文献目録は、Robert Langbaum⁽⁴³⁾ の *The Gayety of Vision* (1964) のものと並んで、完全に近いものである。

デンマーク作家の場合、作家の死後は一般にその作品の批評は下火になるのが普通であるが⁽⁴⁴⁾ Karen Blixen の場合は、国内の読者を今も引きつけるばかりではなく、その主要作品はヨーロッパの多くの国語に翻訳され、さらにヘブライ語にも訳され、⁽⁴⁵⁾ 広い読者層から高く評価されている。

最近の新聞⁽⁴⁶⁾によると、今年三月末には未発表の短編を発表することも一時計画された。彼女の生家は、作家自身とその家族から、Rungstedlundfondet (R. 協会) として寄付され、現在、その地域一帯は鳥類保護区に指定されると共に、建物は、文学、科学振興の目的に使用されることと定められている。具体的には、ここで、デンマーク・アカデミーがその集会を持ったり、国際的な学会や集会をしたりしている。又、彼女がアフリカ滞在中に住んでいたナイロビ近郊の建物は、“Karen House” と呼ばれて、彼女が帰国にあたって手離したのを、後日、デンマーク政府が買い取り、1953年のケニア独立にあたって、政府からの贈物として返され、現在女性の家事教育の一端を荷なう施設として使用されている。

Karen Blixen は不治の病になやまされ、数回の手術を受け、1960年ニューヨークを訪問した頃には、食物は管で流し込まなければならない程に、健康を害していたにもかかわらず、よくこの病気をおして、死ぬ数日前まで仕事をつづけた努力は、驚異に値いするものであり、彼女の作品と共に、彼女自身を人間として、女性として、又、作家としてみた時の多様性、そのスケールの大きさを称讃せざるをえない。

III

Vejene omkring Pisa について⁽¹⁾

50才近くになって、初めてまとまった作品集が出るにあたって、Karen Blixen は男性名 Isak Dinesen をそのペンネームにし、読者も作者を男性だと思って、疑わなかった。⁽²⁾ Isak はヘブライ語で「笑う者」という意味で、年老いてから子供—すなわち作品—を生んだ自分を笑ってつけたものらしい。⁽³⁾そして、作品名を“Gothic”としたのは一種の文学的気どりからだと言う。⁽⁴⁾

Vejene omkring Pisa (ピサを周る道) は、デンマーク版では七つのうちの第一の物語である。⁽⁵⁾この物語は、さらに短い九つの部分からなっている。それらは、I Lugteflasken (気付けびん) II Den ulykkelige Hændelse (不慮の出来ごと) III Den gamle Dames Historie (老貴婦人の話) IV Den unge Dames Sorger (若い貴婦人の悲しみ) V Historien om den lejede Morder (殺し屋の物語) VI Marionetterne (マリオネット劇) VII Duellen (決闘) VIII Den befriede Fange (解放された囚われ人) IX Afskedsgaven (別れの贈り物) である。

物語は1821年、⁽⁶⁾五月の或る夕方、主人公、デンマークから来た Augustus von Schimmelman 伯爵が、Pisaに近い居酒屋で、学校時代のドイツの友人 Karl へ手紙を書いているところから始まる。

そして、この物語の主要テーマとも思われるものが Augustus の言葉で語られる。

Sandheden er vist, ligesom Tiden, et Begreb, der er blevet til gennem menneskeligt Samvær, og endnu beror derpaa. Hvad er f. Eks. Sandheden om et Bjerg langt inde i Afrika, der ikke har noget Navn, og hvorover der ikke gaar hverken Vej eller Sti? —Mens Sandheden om den Vej, jeg nu gaar paa, er, at den fører til Pisa, og Sandheden om Pisa er at finde i Bøger, skrevet og læst af Mennesker, om den er der Enighed imellem Folk.—Hvad er Sandheden om en Mand paa en øde Ø? Og jeg-jeg er som en Mand paa en øde Ø!

真実とは時間と同じように、人間が一緒にいることを通して、又それに依って形成される一つの概念である。例えばアフリカ奥地の、名もなく、道も通じていない山についての真実とは何だろう。私が今歩いている道についての真実とはピサに通じていることであり、ピサについての真実とは、もし人々の間に同意したものがあれば、人によって書かれ、又よまれる本の中にみつけることが出来るのである。孤島にいる一人の男についての真実とは何だろうか、そして私・私は孤島にいる一人の男のようなものだ。

それと共に“Hvad er jeg?” (私とは何か) の問題も出てくるが、それも真実と同じように、他人に映った自分をみるしかない。

.....Saaledes bliver jo vort Væsen genspejlet i ethvert Menneskes Bevidsthed, som vi møder, og saaledes bliver det bestandig fordrejet til en Karikatur, som dog aldrig er helt uden Lighed med vort virkelige Jeg, og som foregiver at være Sandheden om os selv.

自分とは、一定のものではなく、その相手によって変るものであり、自分が一しょに住み、出会う人間の意識の中に反映されているものであると知っている。ここに Karen Blixen の作品の、一つの主要テーマである「多様性」もはっきり出てくる。しかし、自分を見るに適當なも

のがある。Augustus にとって親友の Karl. のように友情、共感を持つ人たちは、自分を映すのに最適の鏡である。その時その時にかかわる人間関係にこそ、ただの夢ではない、何か確かなものがあるのだ。そして、Augustus は、今いる場所には、以上のような意味に於ける鏡になるべきものがなく、孤独の中にいる。

彼は上衣のポケットから大叔母のくれた気付けびんを取り出すが、そこには大きな木と、川にかけられた橋があり、その後にピンクの城が描かれ、`心からの友情`とするされてある。幼い時、そこに行けば幸福になれるという物語をつくったこともあったが、そこへ将来行ってみたいと思い、現在彼はイタリーを旅行中なのだ。そこで第一章は終るが、読者は、そういった彼に、何かがおこるであろうことを予感させられるのである。

期待通りに、すぐ前で事故が起り、彼は一人の老貴婦人に出会う。彼女から打開け話を聞かされて、彼の思考や思いを圧倒し越えた所で、この貴婦人にかかわってしまうことになる。そして、彼女に、Pisa にいる自分の孫娘に会いに来ようとの、伝言を渡すよう依頼され、是非とも Pisa に向わなくてはならないことになってしまう。

Augustus が Pisa の一つ手前の宿に泊まっている時、男装の少女、又、老若二人の王子に偶然出会うことになるが、その王子二人の間に口論が起り、決闘となる。彼はまたしても、期せずして、彼らの立合人になってくれと頼まれ、引き受けざるを得なくなってしまうが、人生の出来事の真ただ中にいる自分に喜びを感じるのである。決闘の前夜少女にマリオネット劇にさそわれ、見物に行くが、その舞台で Karen Blixen の宇宙観ともいうべきものが、`魔女`の口を通して語られるのである。

Sandheden er, at vi alle spiller med i en Marionetkomedie. "Hvad et, mine Børn, særlig gælder om i en Marionetkomedie, er at holde Forfatterens Idé klar. Det er en Hemmelighed, som jeg dog vil betro Eder, at dette er den sande Lykke, som Folk leder efter paa helt andre Steder. Ja, det er det velsignede ved at spille med i en Marionetkomedie, og da jeg nu langt om længe er kommet ind i en, vil jeg heller aldrig ud af den igen. Men oh, I mine Medspillende, —hold Forfatterens Idé klar, ja driv den ud i dens yderste Konsekvens." (p. 40)

真実とか自分とは何かといったことは、他人との関係のなかにあるが、それら人間関係全体が実は、丁度マリオネット劇のようなもので、個々の俳優は、人形と同じく、彼ら一人一人の意志とか計画をこえた或る一つの作家の意図ともいうべき何かによって、最後の最後まで構成され、操られているのである。それをみた Augustus は`私の人生が、自分の役割をよく知っているところのマリオネット劇であれば、人生はたやすく、又、楽しいものなのだが`と思う。(40~41)

この作品の構成にあたって、Karen Blixen は、Augustus が次々と出くわす人物や事件は、実はすべてが深いかかわりを持っていたのだということを彼自身に最後にしらしめるように仕組んでいる。

すなわち、Augustus の最初に出会った老貴婦人の先妻とその娘は出産のために死ぬ。この経

験から、その娘に残した Rosina を、この難から守るべく、老貴婦人は Rosina を、不能の老王子に嫁がせる。しかし、一ヶ月後、Rosina はまだ処女だということで、Pope から離婚許可を与え、恋人の Mario と結ばれる。一方、老王子は友人の Nino を Rosina の寝室へ送り、自分の代役をやらせたのに、まだ妻が処女であると宣言し離婚したのにショックを受け、金だけを取って、殺人を行わなかった殺し屋の話をして、Nino にあてこすりをする。そこで、役目をはたしたはずだと信じている Nino は怒って、老王子に決闘をいどむ。この間の真相は、Rosina が、その夜、一時間だけ恋人の Mario に会いに行っており、その間友人の Agnese が寝室にいたのであった。決闘の場にいる男装の少女がこの Agnese であったのだが、そのことを、決闘の直前に老王子は少女から知らされ、驚きのあまり死んでしまう。そこで Nino と Agnese も事情を了解し、特に彼女は今まで自分がしばられていた、屈辱感から解放される。

以上の成り行きについてきた Augustus 自身も、Pisa では、恋愛沙汰などの他とのかかわりを自らが持つようになる。老貴婦人から或る日招待を受け、その家を訪問する。雨の中を馬車で行く描写から、そこが彼の持っている気付けびんに描かれた場所であることが読者にはわかる。

今は Rosina に子供が生れており、老貴婦人も、今迄の心配をよそに、家族そろって幸福感にひたっている。彼女の全生涯を通じて出会ったすべての出来事が、実は現在のように収まるべくあったことを知ったわけで、いいかえれば『作家』の意図が彼女に明らかになった時点にいたのである。老貴婦人は Augustus に感謝のしるしとして、一つのハート形の気付けびんを贈るが、そこには、彼自身の故郷の家が描かれ、又『心からの愛』とされるのを見て、この老貴婦人と、自分の大叔母が無二の親友であったことも彼にはわかる。

かくの如く、Karen Blixen の、非常にこみ入った話しを、彼女特有の構成力の確かさを以て、どんどん読者を魅惑させながら、ひきずって行く筆致は見事なものである。この物語で作者は、人生の底まで見通すことのできない人間が、物事の先を予想し、それにのっとって、他人の生き方まで計画し、前述のマリオネット劇の『作家』の如く思い込んで行動するが、彼らの想像の及ばなかった形で物事が進行し、現実の報復を受けるさまを優雅な文体で描き出している。一応、九章に至って、読者はこの物語の事件の真相と解決をみるが、主人公 A は、後日、もう少し、年をとった姿で、七つの短編中の一つ、「詩人」に再び現れ、我われは彼の人生に対する考え方の推移をみることになるのである。

Noter

I (1) 主人公 Augustus

(2) 筆者の1972年夏の『ルングステッドルン』訪問の折のこと。

(3) マリオネット劇に出て来る、すべてを知りつくしている者という意(デ版39頁)

(4) テキスト(英語版)の Introduction 参照

(5) Walter, E "Isak Dinesen Conquers Rome: Interview," *Harper's Magazine*, Feb. 1965, (p. 47)

- (6) p. 144 En digteskæbne テキスト
- (7) マサイ・ソマリ族(5)参照
- (8) (9):(5) ibid
- (10) "Isak Dinesen, Author, Is Dead: Noted for Her Gothic Fantasies," *New York Times*,
Sept. 8. 1962 (p. 1)

- II (1) デ, 詩人 Johannes Ewald (1743—81) も1773—1776年にここに宿っていたことがある。
- (2) アンデルセンは K. Blixen の父の恋した Agnes の家へ招かれ子供達に 童話を よんできかせた, Clara Svendsen: テキスト (p. 21 英版)
- (3) ユトランド半島の中東部
- (4) K. B の父の兄は王室に仕え, 父は次男のため軍人, 弟も軍人。
- (5) デンマーク, シュレスヴィー・ホルシュタインを失う
- (6) 彼は3月17日パリコミューンの前日に Paris に来た (1871)
- (7) Boganis (ペンネーム) Jagtbreve (1889) Nye jagtbreve (1892)
- (8) ユトランド半島の出身地
- (9) 健康をそこなっていたので, 家族の重荷になりたくなかったのか, 仕事上の事か, 女性の問題かはっきりしたことはわからない。Titania: Wilhelm p. 29, Svendsen p. 40
- (10) Ingeborg Westenholz (1856—1939)
- (11) 'Tilskueren' と 'Familien de Cats' がのる。1909
- (12) *Out of Africa*-Den afrikanske Farm (1937)
- (13) すぐ下の弟で, もう一人下に Anders がいる。
- (14) ソマリ族出の Farah Aden
- (15) 1935年
- (16) Joh. V. Jensen (1873—1950), 若い作家…Aage Henriksen など
- (17) *Dk. litteratur* (s. 288—291) 参照
- (18) Henrik Pontoppidan (1857—1943) ノーベル賞作家
- (19) 15名, 1970年現在 (Politiken Weekly:28₁₁—4₁₂70)
- (20) この独立した作は最初1926年 "Tilskueren" に掲載された。T. V には1960年
- (21) 父のアメリカ滞在中にかっていた犬の名前からとった。
- (22) 'アフリカ農園', '七つのゴシック物語', '冬の物語, など6冊より抜粋
- (23) これは Clara Svendsen により訳された: *Mulm, stråler og latter: en studie i K. Bs kunst* (1964)
- (24) 筆者のインタビュー :Bent Mohn—'Politikenn' 文芸批評部門担当者 (1972年8月)
- (25) 筆者のRungstedlund 訪問の折: スウェーデン, ノルウェー, フィンランド, オランダ, イタリア, フランス, ドイツ版等有 (1972年8月)
- (26) Politiken Weekly: 17—23 marts, 1972 (s. 13)

- Ⅲ (1) この作品については、Bent Mohn と Hans Brix の間で論争があり、それは Aage Kabell: の *Karen Blixen debuterer* (s. 97—98) にくわしく述べられている。
- (2) 読者が作家に宛てた手紙に ‘Dear Sir,’ で始まるものなどを秘書がみせて下さった。
- (3) Cate, C. “Isak Dinesen,” *Atlantic Monthly*, Dec. 1959. “Isak Dinesen, Author, Is Dead: Noted for Her Gothic Fantasies.”
- (4) *New York Times*, Sept. 8, 1962. (p. 1. Column 5.)
- (5) 英米版では四番目で、一と四の物語が入れかわっている。
- (6) 英米版では1823年となっている。

使用したテキスト

Karen Blixen: *Syv fantastiske Fortællinger*, Gyldendal, København. 1969.

Isak Dinesen: *Seven Gothic Tales*, The Modern Library, New York. 1934.

参 考 書

Karen Blixen: *Den afrikanske Farm*, Gyldendal, København. 1942

Karen Blixen: *Skygger på Græsset*, Gyldendal, København. 1960.

Isak Dinesen: *Winter's Tales*, Vintage Books, Alfred A. Knopf, Inc. & Random House, Inc., New York. 1942.

Mogens Brøndsted og Sven Møller Kristensen: *Danmarks litteratur* (s. 288—291), Gyldendal, København. 1968.

Torben Brostrøm og Jens Kistrup: *Dansk Litteratur Historie Bind 4* (s. 195—210), Politikens Forlag, København. 1966.

Elias Bredsdorff, Brita Mortensen & R. Popperwell: *An Introduction to Scandinavian Literature*, Ejnar Munksgaard, København. 1950.

Aage Henriksen: *Det guddommelige barn og andre essays om Karen Blixen*, Gyldendals Uglebøger, København. 1970.

Johannes Rosendahl: *Karen Blixen*, Gyldendals Uglebøger, København. 1968.

Frans Lasson & Clara Svendsen: *Karen Blixen: En digteskæbne i billeder*, Gyldendal, København. 1969. (デ語版) (*The Life and Destiny of Isak Dinesen*) Random House, New York. 1970.

Merete Klenow With: *Karen Blixen et Udvalg*, Gyldendal, København. 1964.

Hans Brix: *Karen Blixens Eventyr*, Gyldendal nordisk Forlag, København. 1949.

Aage Kabell: *Karen Blixen debuterer*, Wilhelm Fink Verlag, München. 1968.

Tom Kristensen: *Kritiker eller Anmelder* (Syv fantastiske fortællinger s. 71—79), Gyldendals Uglebøger, København. 1966.

Clara Svendsen: *Mulm, stråler og latter: en studie i Karen Blixens kunst*, Gyldendal, København. 1964. (oversat efter *The Gayety of Vision* by Robert Langbaum)

Parmenia Migel: *Titania: The Biography of Isak Dinesen*, Michael Joseph Ltd., London. 1968.